

令和元年6月25日現在

機関番号：11501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02096

研究課題名(和文)ルネサンス期のフィレンツェにおける芸術家と都市の称揚に関する研究

研究課題名(英文)Studies on the praise for artists and city in the Renaissance Florence

研究代表者

石澤 靖典 (ISHIZAWA, YASUNORI)

山形大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：20333768

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：ヴァザーリの『芸術家列伝』(1550、1568年)以前に書かれたフィレンツェ美術に関する一次文献を翻訳し、それらの文献と関連する美術作品について、芸術家と都市フィレンツェの礼賛という観点から分析した。とりわけサンドロ・ボッティチェッリの《サン・バルナバ祭壇画》とクリストフォロ・ランディーノの『神曲』註解(1481年)の関連性から、祭壇画が設置されていたサン・バルナバ聖堂におけるアウグスティヌス会の理念とパトロンであったメディチ家の関係を検討した。これらの研究の結果、1480年代のフィレンツェ絵画において、ダンテの復権を意図した都市礼賛のイデオロギーが存在することを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

16世紀に成立したヴァザーリの『芸術家列伝』が、それ以前のさまざまな美術文献を参照しつつ執筆されたものであることはよく知られているが、ヴァザーリが、単に美術家の事実的なデータだけでなく、都市礼賛のイデオロギーともいべきフィレンツェ美術至上主義の理念もまたそれら「ヴァザーリ以前」の記録から継承したものであることを明らかにしようとした。さらに、ヴァザーリ以前の美術史が同時代美術と有していた密接な関係性について、一連の芸術家称揚の系譜のなかでとらえようとした点に学術的意義があるものと考えられる。

研究成果の概要(英文)：In this study, the primary historical records on Florentine art written before Vasari's "Le Vite" (1550, 1568) have been translated into the Japanese, and the several related works of art were analyzed from the point of the praise for artists and the city of Florence. In particular, the relationship between Sandro Botticelli's "San Barnaba altarpiece" (1488) and Cristoforo Landino's commentary on Dante's Divine Comedy (1481) leads to the Medici family's political intentions and the idea of the Augustine Order in the church of San Barnaba where the altarpiece had been installed. As a result of these researches, it is clarified that there was a city's ideology for glorification in Florentine late Quattrocento paintings, which was intended to restore the Dante's reputation.

研究分野：西洋美術史

キーワード：フィレンツェ美術 都市称揚 芸術家列伝

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) ヴァザーリの『芸術家列伝』(1550、1568年)は、これまで美術史学の礎を形成する重要なテキストとして、さまざまな観点から研究されてきている。またそのヴァザーリが『列伝』執筆の際に参照したとされるさまざまな歴史文献についても、シュロッサーをはじめ、多くの研究者が「ヴァザーリ以前」の美術書として注目してきた。しかし従来これらはいくまでヴァザーリとの関連から言及されることが多く、各テキストがどのような文脈で成立したかを個々の歴史的背景の下に研究する試みは手薄であったと思われる。また「ガッディアーノ稿本」といったテキストの通称が示すように、きわめて重要な記録文書でありながら、いまだ執筆者が明らかでない文献も多い。とはいえ近年では、ランディーノの『「神曲」註解』のように詳細な校訂本が出版されたテキストもあり、こうした成果により「ヴァザーリ以前」に書かれた、美術家称揚にかかわる文献資料についての研究環境も前進を示しつつある。

(2) 一方、申請者はこれまで15世紀フィレンツェの画家ポッティチェッリの作品研究を中心に、芸術家のイメージ形成において重要な要素となる、都市礼賛の国家戦略と美術との関係について論じてきた。これらの研究により、15世紀から16世紀までのフィレンツェにおいて、芸術家および芸術作品が次第に「都市の表象」として機能するようになる状況を跡付けられるようになった。しかし、ヴァザーリ以前の芸術家伝や美術案内書的な記録に関して、その形成過程や美的判断基準を同時代の都市イメージやさまざまな国家政策との関連性から包括的に考察する試みは、いまだ十分になされていないのが現状である。本研究はこうした先行研究の欠を補うべく計画された。

2. 研究の目的

本研究ではヴァザーリの『芸術家列伝(Le vite)』(1550)以前に書かれた美術家列伝風の記録、美術案内書など考察対象とし、それら美術家称揚の系譜をなす諸文献の叙述形式や成立の動機、歴史的な文脈などを検討する。具体的には以下の2点を中心に調査を進める。

(1) フィレンツェの都市論的な記録や文書のなかでも特に重要なものを翻訳・分析し、それぞれに文化史的な考察を試みる。またこれらの記録と同時代の美術作品の関連について、検討をおこなう。

(2) 「フィレンツェ派」や「トスカーナ美術様式」といった、ある特定の都市や地域が、美術様式の一つとして認識される過程やメカニズムを、関連性のあるさまざまな社会的要因や芸術学的問題とともに解明する。

3. 研究の方法

(1) 「ヴァザーリ以前」のフィレンツェ美術に関する代表的な一次文献、とくに芸術家の称揚にかかわる以下の主要な三つの記述形式を対象とし、それらに記載された情報の整理と分析をおこなう。

(a) 「都市礼賛」の一部として美術家を列挙する形式のもの: クリストフォロ・ランディーノ『神曲』註解序文(1481年)、ウゴリーノ・ヴェリーノ『フィレンツェの著名人たち』第三書、芸術家の礼賛(1503年頃)

(b) 「芸術家列伝」的な形式を備えたもの: 「アントニオ・ピッリの書」(フィレンツェ国立中央図書館、1516-1530年)、「アノニモ・ガッディアーノ稿本」(フィレンツェ国立中央図書館、1537-42年)

(c) 「都市美術案内書」の体裁をとるもの: フランチェスコ・アルベルティーニ『彫刻・絵画に関する覚書』(フィレンツェ、1510年)

(2) 各テキストについて、著者の思想基盤、テキスト成立の背景、それぞれの記録者が作品を取捨選択する際の判断基準などを分析し、文化史的・社会史的な視点からのそれらの意義を考察する。最終的にヴァザーリの『列伝』に顕著となる、「フィレンツェ美術様式」という概念や「トスカーナ至上主義」といったイデオロギーの成立過程を、ヴァザーリ以前の美術文書に跡付ける。

(3) 「都市の表象と美術」という観点からフィレンツェ以外の都市についても、補足的な考察をおこなう。

4. 研究成果

(1) 「アントニオ・ピッリの書」の翻訳を一通り完成させ、註解を作成するところまで作業を進めたが、公表するにはいたっていない。もともとこの文書は、内容が一部重複する二編の手稿本(Codice petrei および Codice strozziano)により伝えられているが、それらはいずれも現存しないオリジナルテキストの不完全な謄本であるため、それぞれに含まれる情報や構成には多くの異同が見られる。それらのテキスト間の相違を比較し、誤記や改編の跡を検証する作業を進めるとともに、言及された作品の特定と研究史をまとめる作業に取り組んだ。最終的にこれらの成果にテキストの成立過程にまつわる解題を付して公表する予定である。

(2) フランチェスコ・アルベルティーニ『覚書』に関し、すでに翻訳に解題を付したものを発表しているが、付論として、中世の巡礼案内記である『ローマの驚異』や同じアルベルティーニによる『古今のローマの驚異(Opusculum de Mirabilibus novae et veteris urbis Romae)』などとの関係性を考察した。

(3) 15世紀後半のフィレンツェで活動した人文主義者クリストフォロ・ランディーノの『神曲註解』(1481年)を検討した。この文献の序論には簡潔な「フィレンツェ著名人列伝」が含まれており、15世紀フィレンツェの美術家が列挙されている。まずこのテキストを翻訳し、挙げられた美術家の評価基準を検討するとともに、都市フィレンツェ称揚の文脈に美術家もまた組み入れられるようになった時代背景を考察した。

その結果、『神曲註解』の公刊を期に、フィレンツェにおいて『神曲』の詩句に対する関心が高まり、それにともない、かつてフィレンツェを追放された詩人ダンテを復権することによりフィレンツェの文化的覇権を誇示しようとするメディチ家の動向が浮き彫りとなった。この点を、フィレンツェの画家サンドロ・ボッティチェリが1480年代に制作した《サン・バルナバ祭壇画》(フィレンツェ、ウフィツィ美術館)を中心に検討した(文献)。概要は以下の通りである。

《サン・バルナバ祭壇画》は、フィレンツェのアウグスティヌス派教会であるサン・バルナバ聖堂の主祭壇画として市の医師薬種業組合を注文主として1480年代中頃に制作された。「聖会話」形式を基本とするこの祭壇画の特徴は、聖母の玉座の下に刻まれた銘文「VERGINE・MADRE・FIGLIA・DEL TVO・FIGLIO・(母なる処女、わが子の娘)」が、ダンテ『神曲』の「天国篇」第33歌冒頭の文句を典拠としていることである。本研究代表者は、A.C.ブルーム(1999)らによる15世紀における本祭壇画の鑑賞空間に関する従来の説明を踏まえつつも、銘文の含意を同時代美術における聖母図像との比較からさらに深く掘り下げて検討した。

上述のダンテの詩句は、「父なる神 子イエス 聖母マリア」の関係という観点から解釈した場合、14世紀以来のフィレンツェ美術にしばしばみられる二重のとりなし 図像を想起させる。この図像においてマリアは授乳の聖母のポーズをとる。また本祭壇画とほぼ同時期にフィレンツェ最大のアウグスティヌス派教会であるサント・スピリト聖堂のために制作されたボッティチェリの《聖母子と二人の聖ヨハネ(バルディ祭壇画)》(ベルリン美術館)と比較するならば、このような授乳を中心とする、二重のとりなし 図像への暗示が、当時、作品の主たる受容者であったアウグスティヌス派のひとびとにとって、信者を保護・育成するものとしての授乳の教会 Ecclesia lactans としての聖母を意味するものであったことが明らかとなる。

もともとサン・バルナバ聖堂は、1289年の聖バルナバの祝日(6月11日)に、フィレンツェがカンパルディーノの戦いに勝利したことを記念して創設されたものであり、この戦闘にはダンテもまた参加したと伝えられていた。1481年にランディーノ版のダンテ『神曲』印刷本が出版されたことは、ダンテに縁の深い同聖堂の建て直しに向けて大きな推進力となった。事実、1482年にはロレンツォ・デ・メディチがローマからアウグスティヌス派の厳修派を招聘し、聖堂の改修を積極的に進め、本祭壇画もまたその過程で注文された。

以上のような経緯を踏まえるならば、本祭壇画は、医師薬種業組合のパトロンである聖母子と、メディチ家が実質的に主導していたフィレンツェ政庁が、「知恵」により、アウグスティヌス会を保護し育成することを視覚化したものといえる。しかし同時に画中の洗礼者聖ヨハネの銘文を指さす仕草は、この聖人がフィレンツェの守護聖人であることを想起するならば、銘文の作者(ダンテ)に対する保護、すなわち、かつて町から追放したダンテをふたたび歓呼をもって迎え入れ、その文学的功績の再評価を目指す、ロレンツォを中心とする一連の復権運動の視覚的メタファーにもなっていることが指摘される。ダンテによるフィレンツェの文化的アイデンティティの確立という意味においても、またそうした一連の事業に果たしたメディチ家の役割を市民に想起させる意味でも、本作品は都市において一定の機能を果たすことが期待されていたと結論づけることができる。

(4) 他の科学研究費補助金(基盤研究(B))「東北地方における写真文化の形成過程と視覚資料の調査研究」(課題番号16H0336402)の研究分担者として携わっている、明治時代の東北における写真文化の発展と都市表象に関する調査研究をフィールドバックし、比較文化的視点から、都市の美術の特色を浮き彫りにする試みに取り組んだ。その成果として、1点の成果報告書として公刊した(文献)。

<引用文献>

石澤靖典、ボッティチェリ作《聖母子と四天使と六聖人(サン・バルナバ祭壇画)》ダンテ『神曲』銘文と聖母信仰、山形大学人文学部研究年報、第13号、2016年、1-19頁

石澤靖典編、シンポジウム「近代都市の相貌 明治山形の写真・絵画・建築」成果報告書、山形大学人文社会科学部附属映像文化研究所、2018年

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計1件)

石澤靖典、ボッティチェリ作《聖母子と四天使と六聖人(サン・バルナバ祭壇画)》ダンテ『神曲』銘文と聖母信仰、山形大学人文学部研究年報、査読有、第13号、2016年、1-19頁

[学会発表](計0件)

〔図書〕(計 1 件)

石澤靖典編、シンポジウム「近代都市の相貌 明治山形の写真・絵画・建築」成果報告書、山形大学人文社会科学部附属映像文化研究所、2018 年、全 69 頁

〔その他〕

石澤靖典、書評：イメージの探検学 VII 魔術の生成学：ピエロ・ディ・コジモからパラッツォ・ピッティへ、ありな書房、図書新聞、3284 号、2016 年 12 月 24 日

6 . 研究組織

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。